

身代わりの婚約者は  
恋に啼く。

*S h i b o & F u u m a*

---

なかゆんきなこ

*Kinako Nakayun*

*ternity*



エタニティ文庫

## 目次

身代わりの婚約者は恋に啼<sup>な</sup>く。

5

書き下ろし番外編

彼の意外な一面

319

身代わりの婚約者は恋に啼<sup>な</sup>く。

一 身代わりの逢瀬

「やっと終わった〜」

「ねえねえ、これから飲みに行かない？」

オフィスの壁にかけられた時計の針が午後六時を指すと、みな作業を止め、帰り支度を始める。

中には楽しげに、このあとの予定を話す人達もいた。

そんなやりとりを横目に、私も仕事で使っているノートパソコンをシャットダウンして、机上の電卓を引き出しのうちにしまった。

私、桜井志穂は、事務機器やOA機器を扱う商社で経理事務をしている。

所属している経理課は定時退社が推奨されていて、月初や決算前以外は基本、みんな定時で上がった。

今日は花の金曜日。二連休を前にした仕事終わりということもあって、帰り支度をする同僚達の表情は解放感に溢れ、とても晴れやかだった。

(でも、私は……)

電源が落ち、真っ黒に染まった液晶画面に、冴えないOLの顔がぼんやりと映る。

肩下まで伸びた髪は、仕事中はいつも首の後ろで一本に結わえていた。化粧も最低限で、華やかさは微塵もない。

「……………」

疲れの色が見える表情がいつも以上に陰気くさい。私は自分から目を背けるようにパソコンとノートパソコンを畳んだ。

(早く、行かなくちゃ……)

「桜井さん」

席を立ったところで、同僚に声をかけられた。

彼女は私の同期で、同じ経理事務員の鈴木さんだ。栗色に染めたふわふわの髪が、彼女の愛らしい顔立ちによく似合っている。

「これから何人かで、女子会としてごはんを食べに行こうって話してるんだけど、桜井さんもどう？」

鈴木さんは社交的な性格で、しばしば会社の人と飲みに行ったり食事に行ったりしているらしい。そして私のような付き合いの悪い人間にも、明るく誘いの言葉をかけてくれる。

(女子会かあ、楽しそう)

正直、行ってみたいと思った。けれど――

「ごめんなさい。今日は、先約があつて……」

私はぺこりと頭を下げ、鈴木さんのお誘いを断った。

「そつかさつかー。先約つて、もしかしてデート？」

「……みたいな、ものです」

鈴木さんの言葉に、私は曖昧かいまいに笑う。

「ごめんなさい」

「いやいやいや、気にしないで！ こっちこそ、急に誘つてごめんね」

「いえ、声をかけてもらえて嬉しかったです。また誘つてください」

私はもう一度頭を下げ、バッグを手にオフィスを出た。

すると背中越しに、鈴木さんや他の女性社員達の声が聞こえてくる。

「ほらー、やつば桜井さんだめだったじゃん」

「んー、今日こそはつて思ったんだけど」

「金曜日は毎週そそくさと帰っちゃうんだよね。彼氏とデートかあ、いいなあ」

「でも、デートにはテンション低くない？」

「桜井さん、いっつもテンション低いじゃーん」

あははははと、女性社員達の笑い声が耳を打つ。

確かに今の自分の顔は、恋人と会う女にしては暗すぎるし、テンションも低すぎるの  
 だろう。

(だって、仕方ない……)

これから会う彼は、『私の恋人』ではないのだから――

更衣室で制服から通勤着に着替えた私は、足早に会社の最寄り駅へと向かう。

そして改札内にあるコインロッカーから、小ぶりのキャリーケースを取り出した。

その、なんの変哲もない黒いキャリーケースをガラガラと転ころがして電車に乗り、二駅  
 先で降りる。

真つすぐ進む先はトイレ。この駅は数年前に改装されたばかりで、トイレも新しく  
 綺麗かつ、個室が広めなのでとても助かっている。

幸いにしてトイレは混んでいなかった。私は個室に入り、キャリーケースを開ける。

この中には服、靴、アクセサリー、メイク道具が一式入っている。私は地味な通勤着  
 を脱ぎ、キャリーケースに入っていた服に着替えた。

今日持ってきたのは、なめらかな光沢が美しいホワイトシルクの半袖ブラウスと、鮮あざ  
 やかな深紅しんくのウールツイードスカート。膝丈のプリーツスカートで、重厚感のあるシル

エットが非常に上品に見える。アクセントとして、腰にはゴールドのチェーンベルトを巻いた。

そして上に羽織るのは、スカートとお揃いのジャケット。シャツは長袖にしようかとも思ったけれど、このジャケットを着るから、結局半袖にした。まだ十月の半ばだし、これくらいがちょうどいいだろう。

ストッキングも穿き替えて、通勤用のぺったんこ靴を七センチヒールの黒いパンプスに替える。

次に取り出したのはヘアアイロン。これはコードレスタイプで、充電しておけばコンセントに繋ぐなくても使えるから重宝している。

私はひつつめ髪を解き、毛先をふんわりと巻いた。続いてティアドロップ形で内側に小粒のダイヤモンドが輝く、ゴールドのイヤリングを着ける。

そこまで終わったら、通勤用のバッグの中身とメイクポーチをこの服に合わせたブランドバッグに入れ、残りの荷物をキャリーケースにしまつて、個室を出た。

そして仕上げは、女子トイレ内にあるパウダールームで。

一度メイクを落とし、ファンデーションを塗り直すところまでは、会社のトイレでやっておいた。

あとはいつかデパートの美容部員さんに教わったように、チークをほんのり塗り、アイラインを引き、ブラウン系のアイシャドウをまぶたに重ねていく。眉ペンシルで眉毛も整えて、睫毛にマスカラを塗り、品の良いピンクのルージュを引いたら完成だ。

人が多く出入りする駅のトイレに長時間居座るのが申し訳なく、メイクはなるべく早く終わらせるようにしている。

それでも、いつもの何倍もの手間をかけて施した化粧は、私の顔の印象をがらりと変えた。

(……ああ、本当に、見てくれだけはそっくり)  
鏡に映る自分に、にっこりと笑いかける。

この笑い方も、このメイクも、この服装も。全て私の亡くなった姉を模したものだ。(行かなくちゃ。美穂の、代わりに……)

自分の姿に不備がないか鏡でチェックして、トイレをあとにする。

駅の入入り口付近にあるロッカーにキャリーケースを預け、そこからはタクシーを使い、彼の待つホテルに向かった。

道すがら、タクシーの運転手さんに「デートですか?」と尋ねられる。

それに、会社で鈴木さんに聞かれた時と同じく「ええ、そんなようなものです」と答えたと。

私はこれから、死んだ双子の姉の代わりに、姉の婚約者だった男性と会う。姉の美穂と私は一卵性の双子で、同じ顔かたちをしていた。けれど同じなのは造形だけ。中身は正反対。

地味で内気な私と違って、美穂は明るく社交的で、いつも人に囲まれていた。

見た目も華やかで、自分を磨く努力を怠らず、どんな時も綺麗に装っていた美穂と、私を見間違える人はいなかった。

だけど今、私はこうして美穂そっくりに自分を作り変えている。

たぶん、会社の人が今の私を見ても、すぐにはあの地味で冴えないOLの桜井志穂だと気づかないんじゃないかな。

そんなことを思っている間に、タクシーは目的地である都内でも有数の高級ホテルに着いた。

彼はよく、私との逢瀬にこの場所を選ぶ。お互いの勤め先から近く、通いやすいからだろう。

高級ホテルらしい毛足の長い絨毯の上を歩き、一階にあるカフェラウンジに向かう。そこが彼との待ち合わせ場所だ。

約束の時間は七時で、今は六時四十分を少し過ぎたあたり。少し早いけれど、彼はもう来ているかもしれない。

### 「志穂」

彼の姿を探して席を見回すと、聞き慣れた声が私の名を呼んだ。

「楓馬さん……」

声が出た方に視線を向ければ、四人用のソファ席に座り、こちらに軽く手を上げている人物がいる。

長身で細身の身体にびったり合ったフルオーダーのスーツを嫌みなく着こなす彼の名は、三柳楓馬。業界でも一、二を争う大企業、三柳建設の御曹司で、亡くなった姉の婚約者だった人。

そして、今は私の婚約者でもある人だ。

顔立ちも人形のように整いつつも優しい雰囲気があり、淡い茶色の髪と相まって優雅な印象を与える。人の——特に女性の目を惹きつける容貌だ。現に今も、カフェラウンジにいる女性客がちらちらと彼を見ては頬を染めていた。

気持ちちはわかる。私だって、楓馬さんを見ると未だに心が騒いでしまうもの。

「お待たせしてすみません」

女性達の熱い視線に居心地の悪さを覚えながら、私は彼のもとへ行き、遅参を詫言じた。「ううん、俺も今さつき着いたばかりだから、気にしないで」

楓馬さんはそう言って、自分の向かいに座るように勧める。

私が着席すると、タイミング良く店員さんがオーダーをとりにきた。彼の前にはホットコーヒーのカップ。私も同じものを頼んだ。店員さんが席を離れたのを見て、楓馬さんが再び口を開く。「今日も綺麗だね、志穂。そのイヤリングも着けてもらえて嬉しい。よく似合っているよ」

「あ、ありがとうございます……」

私の耳を飾っているイヤリングは、以前彼に贈られたものだ。褒めてもらえて、気づいてもらえて、嬉しい。

……でも同じだけ、胸が痛い。

だって彼が愛しているのは、私ではなく美穂だから。

このイヤリングだって、本当に贈りたかった相手は私ではなく姉だろう。

美穂が亡くなった今も、楓馬さんは変わらず姉を想っている。深く、深く……

顔かたちだけは同じ妹の私を、身代わりとして傍に置こうとするくらいに。

約一年半前——姉の美穂が亡くなったあと、ほどなく私が楓馬さんの新しい婚約者になった。

元々美穂と楓馬さんの婚約は、両家の結びつきを強固にするための政略結婚。

それでも二人は、家の思惑とは関係なく愛を育んでいた。美穂が亡くなりさえしなければ、二人はきっと幸せな夫婦になっていたことだろう。

ところが美穂は交通事故に遭い、二十三歳という若さでこの世を去ってしまう。

そして双子の妹である私にお鉢が回ってきた、というわけだ。これは、うちの父がぜひにと言いつ出したことなのか。

姉が死んだから代わりに妹を……なんて、ひどい話だよな。

けれど、私の両親はどうしても彼の家——三柳家と繋がりをもちたかったし、楓馬さんもまた、私が新しい婚約者になることを望んだらしい。

私が、見てくれだけは美穂にそっくりだったから。

そう。楓馬さんは私を通して、亡くなった姉を見つめ続けている。

彼が与えてくれる優しさも、愛情の籠った甘い眼差しも、全ては私ではなく、美穂に向けられたもの。

そうとわかっただけで、私は楓馬さんに会いに来る。

それを私の両親と、彼自身が望んだから。

そして、私も楓馬さんを……

「志穂？」

「……っ、ごめんなさい。ぼうっと、しっちゃって」



食事の途中、物思いに耽<sup>かた</sup>っていたところに声をかけられ、慌てて謝る。

あのとラウンジでコーヒを飲んだ私達は、楓馬さんが予約してくれていた、ホテル内にあるフレンチレストランに移動し、夕食をとっていた。

「仕事で疲れているのかな？ いつも俺の都合で呼び出してごめんね」

「いえ、そんな……」

氣遣われ、心苦しくなる。

大企業の後継者として日々多忙を極めている彼に比べたら、私の仕事の疲れなんて軽いものだ。

私は曖昧<sup>あまい</sup>に笑って、食べかけの肉料理を切り、口に運ぶ。

神戸牛ロースのポワレ、だったっけ。ミディアムレアに焼かれたお肉はうっとりするほど柔らかく、脂<sup>あぶら</sup>もしつこくなくて、とても美味<sup>おい</sup>しい。

他の料理も、見た目、味ともに最高の一品ばかりだった。

しかも、ホテルの上階に位置しているので、テールから都内の夜景が一望できる。いかにも人気のデイトスポットといった感じの店だ。

彼は、身代わりの私にも非常によくしてくれる。高価なプレゼントをくれて、素敵なレストランで美味<sup>おい</sup>しい料理を食べさせてくれる。

たぶん、これが楓馬さんと美穂の当たり前前のデイトだったのだろう。

思えば姉は、いつも上等なものに囲まれていた。そして、それが似合う人だった。

「すごく、美味<sup>おい</sup>しいです。ありがとうございます、楓馬さん」

美穂ならきつと、そう言って笑うはずだ。

生前の姉の華やかな笑顔を思い出し、なるべく似せて笑ったところ、楓馬さんは「よかった」と、嬉しそうに微笑んだ。

(楓馬さん……)

彼の笑顔を見ると、胸が熱くなる。

そして同じくらい、ツキンと痛くなる。

(ああ、どうして美穂は死んでしまったんだろう)

あんなことが起こらなければ、今ここでこうして彼と微笑み合っているのは、私ではなく美穂だったのに。

楓馬さんと会っていると、より強く、亡くなった美穂のことを意識してしまう。

そんな内心を表に出さないよう必死に笑顔を取り繕<sup>つくろ</sup>いながら食事を終え、私は彼に連れられて同じホテル内にある客室に移動した。

楓馬さんとの逢瀬<sup>あわせ</sup>は、ホテルで食事をしてそのまま客室に籠<sup>こも</sup>るパターンが多い。二人で泊まっていくこともあれば、どちらかが先に帰ることもある。そのあたりは都合によってまちまちだ。

彼にエスコートされてやってきたのは、いつもと同じ、広々とした部屋の中央に立派なベッドが置かれたダブルルーム。室内はブラウンを基調とした落ち着いた色合いできまどめられていて、一流ホテルならではの上品な雰囲気醸し出していた。

部屋の奥にある大きな窓からは、先ほどのレストランと同じく都内の夜景を楽しめる。けれどこれまでの経験上、ゆっくりと夜景を眺めることはないだろう。

「志穂……」

ボタンと重い音を立てて、私達の背後でドアが閉まる。

まるでその音を合図にするかのように、楓馬さんは私を強く抱き締め、唇を奪った。

「んっ……」

激しく貪られ、否応なく、身体に情欲の火が灯る。

食事のあと、レストランの化粧室で塗り直した口紅は、きつとすっかり剥がれてしまっただろう。

「んっ……んう……っ、ふあ……っ」

「……っ、やっと、二人きりだね」

熱っぽく囁いて、楓馬さんはくすりと笑う。

彼の薄い唇は、私の唇から移った口紅の色でほんのりと染まっている。それが妙に艶っぽくて、背筋がぞくつと震えた。

「可愛い、志穂……」

「……あっ……」

そして今度は首筋に口付けられ、甘噛みされる。

その刺激は甘い官能をもたらし、より私の劣情を煽った。

外ではとても紳士的な人なのに、二人きりになったとたん、楓馬さんは少しばかり性に、荒々しく事を進める。

けれど私は、彼が見せてくれるそんな一面も嫌いになれなかった。

「あ……っ、ん……っ、は……っ」

再び唇を奪われ、身体が軋むほど強く抱き締められる。

息が苦しい。でも……やめられない。やめたくない。

「はあ……っ、あ……っ」

楓馬さんとするキスは、いつも私を熱くする。

彼の舌で歯列をなぞられ、舌を絡め取られるだけで、私の中の女の部分が疼いて疼いてたまらなくなるのだ。

「……志穂……」

「……っ」

いったん顔が離れたかと思うと、吐息交じりの熱い声に名を呼ばれ、ドキッとさせる。

志穂、と確かに自分の名前を呼ばれたのに、一瞬『美穂』と呼ばれた気がしたのだ。  
 (なにを、馬鹿なことを……)

私は美穂の身代わりなんだから、そう呼ばれたっておかしくない。なのに『美穂』と呼ばれたような気がただけで、こんなにも胸が痛むなんて……  
 傷つく資格など、私にはないのに。

(……ごめんなさい……)

罪悪感が込み上げてきて、私は心の中で亡き姉に謝った。

妹が自分に成り代わって婚約者に抱かれるのは、美穂にしてみればさぞ業腹(ごうはら)だろう。なのに私は、彼の手を振り払うことができない。

それどころか、自ら進んで楓馬さんに身を投げ出してしまっている。

(ごめんなさい……)

謝ったからといって許される行為ではないと、わかっている。

亡くなった姉の代わりに抱かれるのは、不毛な行為だとも。

それでも私は、彼と会うことをやめられないのだ。

楓馬さんに抱かれることを、心の底から拒め(こは)ない。

だって、私も彼を愛しているから。初めて出会った時からずっと、姉の婚約者であり、姉の恋人であった楓馬さんに焦(こ)がれている。

(楓馬さん……)

いずれ、こんな歪(いびつ)な関係は終わりを迎えるだろう。

今は私を美穂の代わりとして求めている彼も、遠からず目を覚ますはずだ。

だけどその時まで……。楓馬さんが私を望んでくれる限り、彼の傍にいたい。

だから私は姉への罪悪感を抱きながらも、彼が与えてくれる快樂に身をゆだねてしま  
 うのだ。

一時のことだから許してほしいと、亡くなった姉に言い訳して。

(なんて、嫌(きら)な女(おんな)だろう……)

そう自分を蔑(あざわら)みつつ、今度はどちらからともなく唇(くちびる)を合わせ、お互いの身体(からだ)を弄(もよほ)り  
 合う。

「ん……っ、はあ……っ」

何度も何度も深いキスを交わす間に、楓馬さんは私の肩からバッグをとり、床に落と  
 した。続いてジャケットも脱(ぬ)がされ、もつれ合うようにベッドに押し倒される。

「あっ……」

その拍子に、私の足から靴が脱げかけた。

すると、中途半端に爪先(つまさき)に引っかかった靴に気づいた楓馬さんが、恭(うやまつ)しくそれを手  
 にとり、床にそっと並べて置いてくれる。

さつき落としたバッグやジャケットとはえらい違いだ。この差はなんなんだろうと  
思っていたら、彼はにやつと笑みを浮かべ、私の右足をとった。

「えっ、あつ、やつ……！」

楓馬さんは床に跪ひざまずき、あろうことか私の足を——ストッキングに包まれた爪先つまさきを口  
に含む。

「だ、だめっ、汚いっ……」

「汚くなんてないよ」

そう言っつて、楓馬さんは親指の腹をべろつと舐なめた。

「んんっ……」

ねつとりと唾液を絡ませた舌に舐なめられただけで、私の身体はびくつと反応する。

止めなければならぬ。彼にこんなことをさせてはいけぬ。そう思うのに、ちゅぱ  
ちゅぱと音を立てて足の指をねぶられるのが気持ち良くて、足の裏を舐なめられただけで  
感じてしまっつて、止められなかつた。

「はあっ……」

それに気を良くしたのか、楓馬さんは左足も同様に愛撫あいぶする。

彼の舌に、唇に触れられる度たび、私はびくつ、びくつと身体を震わせた。

やがて楓馬さんはベッドに上がつて私の左脚を持ち上げると、足首から太もも、膝へ

キスを落としていく。

「ごめん、志穂。このストッキング、破いてもいい？」

そう尋ねてくる彼は、いつも以上に興奮しているように見えた。

「……っ」

戸惑ったけれど、楓馬さんがそうしたいならと、小さく頷く。

「ありがとう」

彼は嬉しそうに微笑み、ストッキングに手をかけ、びりつと破いた。

「んっ」

左脚だけでなく右脚も、一か所だけでなく何か所も破かれて、私の両脚を包んでいた  
薄い膜にはいくつもの穴が開いてしまう。

(なんだか、乱暴されているみたい)

荒々しくストッキングを破られ、無理やり犯されている気分になる。

でも怖いとか、嫌きらだとかは微塵みじんも感じなくて、むしろ……興奮してしまつた。

私っつて、自分で思うよりずっと変態なのかもしれない。

「んっ……」

そう思考を巡らせている間に、露あらわになつた脚に楓馬さんの唇が落ちてくる。

「あっ……あ……はあっ……」

薄い膜越しに舐められるのとはまた違った感触に、艶めかしい吐息が零れた。

「はあっ……、……ん……っ」

ぺろぺろと生肌を舐められて、軽く甘噛みされる。くすぐったくて、こそばゆい。それでも楓馬さんは、痕が残るほどきつく吸ったりはしない。一度、服で隠れない部分に痕をつけられた時、「見えるところには残さないでほしい」とお願いしたのを、律義に守ってくれているのだ。

楓馬さんの唇は、どんどん上へと上がってくる。

スカートがめくらられて、ストッキングと下着に守られた秘所が彼の眼前に晒された。

「……………っ」

楓馬さんとはもう何度も身体を重ねているけれど、こうしてまじまじと恥ずかしい部分を見られるのには未だ慣れず、つい顔を背けてしまう。

「……………っ」

「んっ」

彼がそこに顔を埋めたかと思うと、布越しに、秘裂をぺろぺろと舐められた。

湿った感触が伝わってくる。なのにストッキングと下着に阻まれて、ひどくもどかしい。

早く直接触れてほしいのに、楓馬さんは執拗に、焦らすように布の上からの愛撫を続

ける。

「あっ、ああっ……」

唇だけでなく指の腹で撫でられて、時折息を吹きかけられて、私はたまらず彼の頭を掴んだ。

「やっ、あっ、あっ……んっ」

気持ち良い、気持ち良い……っ。

でも、もどかしいの。これじゃ足りないの……っ。

「楓馬さ……っ」

求めるように、ねだるみたいに、私は彼の名を呼んだ。

すると楓馬さんは、私がそうするのを待っていたかの如く、愛撫の手をぴたりと止める。

「可愛いね、志穂」

彼はようやくやくストッキングごと私の下着に手をかけ、脱がしてくれた。

「んっ……」

スカートは穿いたままなのに、その下には何もない。

露わにされた恥ずかしい部分の、薄い茂みの下はすでに濡れていた。布越しに染み出した彼の唾液と、自らの蜜とで。

「こんなに濡らして……。早く食べてって、誘っているみたいだ」  
楓馬さんはうっとりとき、再びそこに顔を埋める。

「ひうつ……」

彼の舌に直接舐められる。待ち望んでいた刺激に、電流がピリツと走るのに似た快感を覚えた。

「あつ、ああつ……んっ……」

楓馬さんの愛撫はいつも丁寧で、そして執拗だ。

ちゅうちゅうと蜜を吸り、髪を一枚一枚丁寧に舐めて、一番敏感な芽をねぶっては、さらに蜜を溢れさせる。

「あつ、ああつ」

気持ち良くてたまらなくて、頭の中がどうにかなりそう。

しかも彼は、口だけでなく指でも刺激を与えてくる。

「ひあああつ……！！」

指の腹で芽を擦られて、摘まれて、悲鳴じみた声が零れた。

「志穂のここ、ぷっくりしてる。美味しそう……」

「んんんっ……！！」

硬くしこった花芽に、楓馬さんの舌が伸びてくる。

そして舌先でちろちろと転がすように舐められて、私はびくびくつと身体を震わせた。

「あつ、ああつ……」

果ての気配が近づいている。

「もう、だめえ……っ、イ……っ、イッちゃう……っ」

「うん、イッていいんだよ、志穂。俺の前で、淫らに果ててみせて……?」

私の秘所を舐めながら、楓馬さんが焚きつけてくる。

「んうっ……あつ、ああつ……」

そして、彼の指に容赦なく花芽を摘まれた瞬間――

「ああああつ……！！」

私はびくん！と一際大きく身体を震わせて、絶頂を迎えたのだった。

「……あつ……はあ……っ」

一度果ててもなお、その余韻に痺れる私の身体は勝手に快感を得てしまう。

そんな私の頬に「とても可愛かったよ」とキスをして、楓馬さんはいったんベッドから下りた。

彼は自分のネクタイに手をかけ、ゆっくりと服を脱いでいく。

私はほうつとしたまま、徐々に露わになっていく楓馬さんの身体を見つめていた。

彼の身体は、細身ながらとても引き締まっている。なんでも健康維持のため、ジムに

通って鍛えているらしい。

やがて下着一枚の姿になった楓馬さんは、脱ぎ捨てたジャケットの内ポケットから数枚綴りの避妊具を取り出して、ベッドに戻ってきた。

そして避妊具を布団の上に置き、今度は私の服に手をかける。

ブラウスとスカート、それからブラジャーを脱がされて、私は生まれたままの姿でシーツの上に転がされた。

ああでも、まだ身につけているものがある。

「これも、とってしまおうね」

楓馬さんは私の髪を優しく左耳にかけ、イヤリングをそっと外した。

同じく右耳のイヤリングも外して、サイドボードの上に置く。そして軽くなった耳たぶの、留め具に挟まれてへこんだ部分に唇を寄せて、ちゅっつと口付けた。

「んん……っ」

彼の柔らかい前髪が頬をくすぐって、こそばゆい。

それに、耳たぶを舐められるのも……感じてしまう。

私の性感帯を知り尽くしている楓馬さんは、そうして耳を愛撫しながら、手を私の胸元に這わせた。

「あっ」

これまでずっと放っておかれていた胸に、ようやく触れてもらえる。

優しいタッチで撫でられ、やわやわと揉まれて、じわじわと高まっていく快感に身体が震えた。そして時折、指の腹で頂をくりくりと擦られ、転がされる。

「ああっ……」

「志穂は胸の感度も良いよね」

私の耳元で、楓馬さんが楽しげにそう囁いた。

「どこもかしこも柔らかくて、手にぴったりと吸いついてくる。それに、気持ち良くなってくると身体がほんのり赤く色づいて、本当に……可愛いっらないな」

「楓馬さ……っ」

彼はいったん身を離すと、今度は唇で私の胸を、指で秘所を愛撫し始めた。

「んんっ……」

胸の頂を食まれながら、未だしつとりと濡れている秘裂を暴かれ、蜜壺に指を挿し込まれる。

初めて楓馬さんを受け入れた時には硬く閉じていたこども、今ではすんなりと彼を受け入れてしまうくらい、柔らかく花開いていた。

「あっ、ああっ」

濡れそぼる蜜壺を、楓馬さんの指でじゅぶじゅぶと犯される。

彼が指を動かす度に淫らな水音が響いて、恥ずかしくて、でも気持ち良くて、たまたまなくて……

「はあっ……っ」

また、果ててしまおう。

けれどそうなる前に、楓馬さんは私の蜜壺から指を引き抜いた。

「あっ……」

「そんな名残惜しそうな顔してもだめだよ。俺も、そろそろ限界だから……」

言って、彼は私から身を離す。

そして下着を脱ぎ捨てると避妊具を取り出し、屹立する自身に被せた。

(あ……)

「触って、志穂」

私の上に跨った楓馬さんが、私の手を取り、自身へと導く。

薄いゴムの膜に覆われた彼の肉棒はとて硬かった。これからこの凶器に貫かれるのかと思うとたまらず、私は期待と悦びに息を呑む。

「楓馬さん……」

「うん」

私が彼の名を呼んだのを合図に、楓馬さんは私の太ももを掴んで開かせる。そして秘

裂に自身を宛がい、ゆっくりと入ってきた。

「んんっ……」

この瞬間だけは、何度経験しても少し苦しい。

「くっ……」

ただどいつも余裕綽々といった様子の楓馬さんの、余裕のない、切なげな表情が見られるのが嬉しかった。

「……っ、はあ……っ」

彼の薄い唇から、艶めかしい吐息が漏れる。

そうして自身を根元まで埋めた楓馬さんは、「動くよ」と言ってから、腰を前後に動かした。

「んっ、んんっ、あっ、ああっ……んっ」

ゆさゆさと身体を揺らされて、何度も何度も彼自身を突き入れられる。

穿たれる度に、私の口からは甘い嬌声が零れた。

「あっ、ああっ」

「志穂……っ」

それが楓馬さんを煽るのか、彼は徐々に腰の動きを速めていった。

「んあっ、ああっ」



(はっ、はげ、しい……っっ)  
 容赦なく腰を叩きつけられて、結合部からはちゅっ、ぱちゅっ和水音が響く。  
 でも、激しくされるのは嬉しい。それだけ自分が求められているように思えるから。  
 (楓馬さん……っ)

身代わりでも、いい。

彼が本当は美穂を相手にしているつもりなのだとしても、楓馬さんに抱かれるだけで、私は幸せを感じずにはいられないのだ。

「あっ、ああっ、あっ」

そんな自分をあさましい、はしたないと責める気持ちは拭えないけれど、彼が与えてくれる快楽に溺れてしまう。

(ごめんなさい、ごめんなさい……っ)

「あっ、あああっ……！」

私は両手でシーツをぎゅっ握り、二度目の絶頂を迎えた。

「……っ」

その拍子に、意図せず彼自身をきゅうっ締めつける。

とたん、私を見下ろす楓馬さんの顔がくっくと快楽に歪んだ。

(かわいい……)

私は彼の頬に手を伸ばし、しっとり汗ばんだ肌を撫でる。

楓馬さんのことが可愛くて、愛おしくて、我慢できなかったのだ。

「……っ」

楓馬さんは息を呑み、それから私の手をとって、その掌にちゅっキスをしてくれた。そして再び、ゆっくりと腰を動かし始める。

まだ終わってないよと、私に教えるみたいに。

「あっ、あっ、ああっ……」

「志穂……っ、志穂……っ」

彼の果ても近いのか、楓馬さんは切羽詰まった声で私の名を呼びながら奥を穿つ。絶頂を迎えたばかりでより敏感になっていた身体は、それだけであっという間にまた

快楽の高みへと押し上げられ――

「あっ、やつ、イツちゃ……あああああっ！」

「……っ！」

ゴムの中に精を吐いた楓馬さんと同時に、三度目の果てを迎えたのだった。

「志穂、志穂……」

「ん……っ」

名を呼ばれ、肩を優しく揺り動かされる。

どうやら私は感じすぎて、少しばかり気を失ってしまっていたらしい。

「楓馬さん……」

「とても可愛かったよ、志穂」

彼はそう言っ、私の唇にちゅっと口付けてくれた。

どうやら楓馬さんに満足してもらえたようだ、嬉しくなる。

それにセックスの間、何度も甘く、切なげに名を呼ばれたことを思い出し、胸がときめいた。

けれど……

「……っ」

こちらをじっと見つめている彼の瞳には、私の姿が映っている。

美穂にそっくりの、私の顔が。

(……ああ)

それを認めた瞬間、高揚していた気持ちに冷や水をかけられた思いがした。

そうだ。彼が本当に呼びたいのは私の名前じゃない。

彼が本当に抱きたいのは——愛したいのは私じゃなくて、姉の美穂なのだ。

(ごめんなさい……)

美穂じゃなくて、ごめんなさい。

美穂じゃないのに、楓馬さんに抱かれて、悦んで、ごめんなさい……っ。

彼との逢瀬は、いつもこう。楓馬さんに会えて嬉しく感じるのと同じだけ、彼や姉に

対して後ろめたくて、気が塞ぐ。

どうしてあの日、死んだのが自分じゃなくて美穂だったんだろうって、思ってしまう。

「……………」

「志穂……?」

「……っ、あ、ごめんなさい……。ほうっと、して」

「やっぱり疲れてるんじゃないの? 今日はまだもう休もうか?」

「ちがつ……、そうじゃ、なくて……」

私の心が弱いから、悪いのだ。

楓馬さんが今でも美穂を愛しているとわかっているのに。

わかっ、身代わりになることを受け入れたのに。

未だにいちいち傷ついて、後ろ向きな感情に囚われる。

「……楓馬さん……もっと、して……」

私は二人に対する罪悪感と、自分に対する嫌悪感から目を逸らし、逃れるみたいに彼へ絶った。

初めて楓馬さんと身体を重ねた時と、同じように。

「抱いて……」

「志穂……」

快樂に溺れている間だけは、それ以外のことを感じずに済むから。忘れていられるから。だから……

「……わかった」

楓馬さんは頷いて私の手をとり、指先にキスをくれた。

彼に口付けられると、そこから温かいものが広がっていくような感覚が生まれる。少しだけこそばゆくて、気持ち良い。

「もつと、いっぱいキスして」

そうねだれば、楓馬さんはくしゃっと顔を歪め、「あんまり可愛いこと言わないで」と言った。

「籠たがが外れて、優しくしてやれなくなる」

「それでもいい」

彼になら、きつと何をされても許せるから。

優しくしてくれなくてもいい。

乱暴にされてもいい。

美穂の代わりでも……いい。

何をされても、構わないから。だから……

(今だけは、私を抱いて、放さないで)

言葉にできない想いを、胸に抱く。

彼は私の姉が愛した人。私の姉を、今も愛している人。

本当はきつと、こんな風に触れ合うことすら許されない人。

「志穂……っ」

それでも今だけは、私の名を呼んでくれるから。

身代わりでも、私を求めてくれるから。

私は世界で一番愛しているこの人に、縋すがらずにはいられないのだ。

## 二 姉の婚約者

私達姉妹と楓馬さんの出会いは、八年前。

私達が十七歳、楓馬さんが十九歳の年の夏のことだった。

夏休みに入って間もなく、父が突然、美穂に良い縁談があると言い出した。

私達の父は先代——祖父が興した不動産会社を引き継ぎ、経営している。その会社の取引先である大企業、三柳建設の御曹司と美穂との縁談話が持ち上がっていると、父は大喜びだった。

そして後日、楓馬さんと彼のご両親を我が家に招き、私も妹として同席させられた。

当時、この縁談に乗り気だった父と違い、あちら側はあくまで一度会わせてみて、お互いに相手を気に入るようなら……と思っていたらしい。

無理もない。だって三柳家なら、他にもいくらだって条件の良い縁談があっただろうから。むしろ、一度でもチャンスをもたらえたことが奇跡だったのだ。

その奇跡は、美穂にとっても私にとっても運命の出会いとなった。

「はじめまして、三柳楓馬です」

「……………」

我が家のリビングで初めて楓馬さんと顔を合わせた時、私は人知れず息を呑んだ。なんて綺麗な人なんだろう……と。

彼のことは、両親から事前に聞かされていた。

成績優秀で見目も良い、将来有望な若者だと。

だから元々すごい人なんだとは思っていたけれど、実際に目にした楓馬さんは、私が想像していた以上に素敵な人だった。

美しいお母様によく似た容貌は、まるで少女漫画のヒーローみたいに整っている。色の薄い髪の毛はサラサラで柔らかそうだったし、頬に影を落としそうなほど長い睫毛に縁取られた茶色の目は、とても澄んで見えた。

女性的に整った顔立ちながら、眉やすっと通った鼻筋には男性らしい凛々しさも感じる。うつつら笑みを描いた唇は形が良く、妙に色っぽかった。

それに雰囲気も大学一年生とは思えないほど落ち着いていて、大人っぽく、恰好良い。今まで男性へ必要以上の関心を抱いたことなんてなかったのに、私は何故か楓馬さんから目が離せなかった。

「……………」

私はいったい、どうしてしまったのだろう。

礼儀正しく振る舞うよう、両親から事前に口を酸っぱくして言われていたにもかかわらず、声を発するのも忘れ、彼に見入っていた。

その時ふと、楓馬さんと目が合う。

（あ……）

彼は髪と同じ、色素の薄い目を大きく見開いたかと思うと、次の瞬間には花が綻ぶような笑みを浮かべた。

「……………」

彼に微笑みかけられ、胸がカッと熱くなる。

急に恥ずかしさが込み上げてきて、私はぱっと視線を逸らした。

（どうしよう……。変に、思われたかな……）

「ちよつと、志穂。あなたもご挨拶なさい」

私が一人うろたえていた間に、美穂や両親は挨拶を済ませたらしい。

母に咎められ、三柳のご両親も私を見ていることに気づき、慌てて頭を下げた。

「あ……っ、す、すみません。はじめまして。美穂の妹の志穂、です」

「志穂……さん」

楓馬さんの形良い唇が、私の名を唱えた。

「はっ、はい」

彼が、私の名を呼んでくれた。

たったそれだけのことで、心臓が破裂しそうなほどドキドキする。

顔が妙に熱い。きつと赤くなっているだろうと思うと、余計に恥ずかしくなって俯く。

そんな私に、楓馬さんは優しく声をかけてくれた。

「可愛い名前だね」

「……っ」

楓馬さんにとっては、おそらくただの社交辞令。

でも、私は嬉しかった。そして、自分の心に生まれた感情にはつきりと気づいてしまっ。

（どうしよう……）

姉の縁談相手なのに。姉と結婚するかもしれない人なのに。

私はこの時、楓馬さんに恋をしたのだ。

一目惚れだなんて、漫画や小説の中だけの出来事だと思っていた。

でも私は、自分でもどうしようもなく、彼に惹かれてしまった。

「——そうそう、三柳の奥様は音楽鑑賞が趣味でいらっしやると聞きました。実は、うちの美穂はピアノがとっても得意なんです。幼稚園のころから習わせていて、コンクールで優勝したこともありますの」

初めての感情に戸惑う私を尻目に、楓馬さんと美穂の初顔合わせは和やかに進んでいく。

話をするのは、もっぱら両家の母親達だ。特にうちの母が張り切って、三柳のご両親や楓馬さんに美穂を売り込んでいく。

「まあ、素晴らしいわ。私は聴くのも弾くのも大好きなんです。今度ぜひ一緒に弾いてみたいわね。いいかしら？ 美穂さん」

「もちろん、喜んで」

美穂ははにかんだような愛らしい笑みを浮かべて頷いた。

「私の影響で、楓馬もクラシックが好きみたいなの。子どものころからバイオリンをやっていた」

「素敵ですわあ」

「ふふつ。楓馬さん、今度演奏を聞かせてくださいね」

「ええ。俺も美穂さんの演奏を聞いてみたいな」

美穂がにっこりと笑ってお願いすると、楓馬さんも笑顔を返して頷く。

大人しくて地味で、引つ込み思案じあんな私と違って、明るく華やかで人を惹ひきつける美穂。誰が見ても、美穂と楓馬さんはお似合いだった。音楽という共通の趣味もあり、二人ともお互いを気に入ったらしく、話が弾んでいる。

うちの両親は終始上機嫌で愛想をふりまき、あちらのご両親も微笑ましそうに当事者達を見守っていた。

（私、この場にいる必要があったのかな……）

「……志穂さんも、何か楽器を？」

一人疎外感を覚えていると、ふいに、楓馬さんが私に話しかけてくる。

おそらく、ずつと押し黙ったままの私に気を使ってくれたのだろう。

「え……と、私は……」

「ああ、志穂は何も」

しかし私が口を開いてすぐ、それを遮さへぎるみたいに母が愛想笑いを浮かべながらまくしたてた。

「いえね、この子にもピアノを習わせようとしたんですけど、ちっともじっとしてられなくて、すぐやめてしまったんですのよ。本当に、美穂と違ってこの子はあまり出来が良くなくなって」

その点、美穂は……と、母は話題の中心を愛娘に戻す。

私は微笑笑を浮かべて、言葉を呑み込んだ。

（習わせようとした……か）

うそばっかり、と心の中で嘆息する。

母は私に習い事なんてさせてくれなかった。幼稚園のころ、「私も美穂みたいにピアノを習いたい」と言った私を「あんたなんかにはできるわけないでしょ」と叱りつけ、家のピアノに触ることも許さなかった。

母は昔から美穂だけを可愛がり、私には目もくれなかったのだ。それどころか、嫌ってさえた。

その後も、楓馬さんやあちらのご両親が気を使って私にも話題を振ってくれたけれど、その度たびに母が強引に美穂の話題に戻し、私はろくに会話に加われないまま最初の顔合わ

せが終わった。

まあ、お見合いの主役は美穂なのだから、母のやり方も間違っつてはいないのだろう。ただ母がことさら私を美穂と比べて貶す度、楓馬さんに痛ましげな視線を向けられるのが恥ずかしく、居た堪れなかった。

(かわいそうな子だと……思われたのかな……)

私を見る彼の瞳には、憐憫の情が宿っている気がした。

そのせいか、楓馬さんに心惹かれて高揚していた気持ちだが、すっかり打ちひしがれている。

ようやく膨らみかけた蕾が、花を咲かせる前にしぼんでしまったみたい。

(……でも、これでいいのかもしれない。だって、楓馬さんは美穂のお相手なんだから)

彼は、私なんかが好きになっていい人じゃないもの。

「——それでは、お返事はまた後日。改めてということだ」

三柳のお父様がそう言うつうちの両親に頭を下げ、退出の意を告げる。

両親はもう縁談が成立した気であるのか、ニコニコと上機嫌な顔で「ええ、良いお返事をお待ちしております」と答えていた。

三柳夫妻と楓馬さんは車で来ていたので、桜井家の四人も家の駐車場まで出て彼らを

見送ることに。

美穂は三柳のお母様にとても気に入られたようで、そこでも「今度一緒にコンサートへ行きましょうね」と誘われていた。

そして運転席にお父様、助手席にお母様が乗り込み、最後に楓馬さんが後部座席に乗り込もうとする。

その間際、彼の視線が私を捉えた。

(あ……っ)

ただ目が合っただけで、風いであはさずの心にさざなみが立つ。

「……………」

楓馬さんは物言いたげな表情で、そして実際に口を開き何かを言おうとして……でも結局何も言わないまま、車に乗り込んでしまった。

あの時、彼は何を言おうとしていたのだろう。

いや、きっとそれは私にはなく、美穂に向けて告げようとした言葉だったのだ。

視線が合ったと感じたのも、私に何かを言おうとしていたと思ったのも錯覚……うん、そうだったらよかったのという願望だったのだろう。

もしかしたら楓馬さんは後日と言わず、その日の内に美穂へ婚約の意思を伝えたかったのかもしれない。だって二人はそれくらい、打ち解けているように見えたから。

そして後日、三柳家から正式な返答があり、楓馬さんと美穂は婚約を結ぶことになった。といっても二人はまだ未成年ということで、正式な結納は美穂が大学を卒業してからという話だった。

やっぱり、楓馬さんは美穂を伴侶に選んだのだ。わかっていたはずなのに、その知らせを聞いた時には胸が痛んだ。最初から、私は彼にとつては縁談相手の妹に過ぎないというのに、失恋した気になるなんて、変だよな。

一方うちの両親は、大企業の経営者一族と縁を結べるとあって大喜びしていたわけ。二人の婚約を足がかりに、父の会社と三柳建設とで共同プロジェクトも始動するという話だった。

そんな両親の期待を一身に受けた美穂は、楓馬さんの婚約者として、結婚を前提にした交際をスタートさせる。

二人の仲は順調で、彼はよく美穂に会いにうちを訪ねてきたため、学校から帰ると楓馬さんとぼったり顔を合わせる、なんてことも多かった。

あれは、二人が婚約を結んだ年の冬——だっただろうか。

授業を終えて帰宅した私は、家の玄関に見慣れない靴を見つけた。カジュアルなデザイン、男物のレザーブーツだ。

(もしかして、楓馬さんが来てるのかな……)

そわそわと落ち着かない気持ちのまま、私はローファーを脱ぎ、家上がった。

すると廊下の奥——美穂のランドピアノが置いてある部屋から、微かに音が聞こえてくる。

ポーン、ポーンと、跳ねるような高い音。それはやがて、一つの旋律を描き始める。

ピアノの音だ。この家でピアノを弾くのは美穂だけだから、たぶん、楓馬さんと一緒にピアノ室にいるのだろう。

(一応、挨拶した方がいいよね……)

美穂の妹として、将来義兄になる人に失礼のないように。

そう自分に言い聞かせ、ピアノ室へと向かう。

でも本当は、ただ楓馬さんの顔が見たかっただけなのかもしれない。

(あ、もう一つ、音が……)

最初はピアノの音だけだった旋律に、艶のある弦楽器の音色が重なる。

(これは、楓馬さん……?)

近づいてみると、ピアノ室の扉が開いていて、廊下から中の様子が窺えた。

制服姿の美穂が、口元に笑みを浮かべ、楽しそうにピアノを鳴らしている。

その傍らには、バイオリンを奏でる楓馬さんが立っていた。



(……綺麗……)

二人が奏でる音も、その光景も、とても綺麗だった。冬の淡い光が差す部屋で、軽やかに音楽を奏で合う恋人達。

薄暗い廊下からそれを羨ましげに見つめる私からは、別の世界の住人に思える。

(いいなあ……)

私は、美穂みたいにピアノを弾けない。他の楽器だって何も弾けない。

だから、こんな風に楓馬さんと音を重ねることもできないのだ。

「……………」

疎外感が胸に込み上げてくる。

たった数歩の距離が、ひどく遠く感じられた。

同時に、これ以上近づいてはいけなとも思った。

私なんか、二人の世界を邪魔してはいけないのだと。

「……あ、今間違えただろ、美穂」

「いいの。コンクールに出るわけじゃないんだし、楽しく弾けたらそれでいいのよ」

「はいはい」

「そういう楓馬くんだって、さっき音外してた」

「ばれていたか」

「ばれないと思ったか」

楓馬さんと美穂は楽器を弾きながら軽口を叩き、笑い合う。

最初こそ家の思惑で引き合わされた二人だったけれど、今ではすっかり仲睦まじい恋人同士になっていた。

そんな二人の親しげな空気がまざまざと感じられ、胸が苦しい。

(……私、馬鹿みたい)

楓馬さんの顔が見られる、なんて。何を期待していたんだろう。

彼は美穂の婚約者。美穂に会いに来たのであって、私に会いに来てくれたわけじゃない。

「……………」

美穂達が気づいていないのをいいことに、私は音を立てないようそっとその場をあとにした。一瞬でも浮かれた自分が、恥ずかしくて仕方ない。

足音を忍ばせて二階へ上がり、自室に入る。

扉を閉めても二人の奏でる旋律が微かに聞こえてきて、私はそれから逃げるみたいにベッドへダイブし、布団を被って音を遮ろうとした。

そうして、どれくらいじっとしていただろう。

ようやく階下が静かになり、もぞ……と布団から顔を出す。

「あ……」

制服のまま潜り込んだから、スカートが皺しわになっていた。

(そういうえば、美穂も制服のままだったな……)

私と美穂は別の高校に通っている。私が通う公立高校の制服はなんの変哲もない紺のブレザーとチェックスカートだけれど、美穂が通う私立女子高の制服は有名デザイナーがデザインしたセーラーカラーのワンピースタイプで、とても可愛い。

(……とりあえず、着替えよう)

のろのろと起き上がり、制服に手をかける。

するとその時、コンコンと扉をノックする音が響いた。

「志穂、帰ってるんでしょ？ 開けていい？」

「う、うん」

制服を脱ぐのをやめ、私は返事をする。

ほどなく扉が開き、制服姿のままの美穂が顔を覗かせた。

「あのね、今から楓馬くんに勉強を見てもらうんだけど、志穂も一緒にどう？」

「勉強？ ピアノはもういいの？」

「あ、やっぱり聞こえてた？ あれは志穂が帰ってくるまでの暇潰しみたいなものだったから、もういいの。ほら、うちの学校も志穂の学校も、そろそろテスト期間でしょ？」

だから楓馬くんに家庭教師をお願いしたの」

「そう、なんだ」

こういうことは、これまでにによくあった。

有名国立大に現役で合格していた楓馬さんは、とても頼りになる先生だ。彼に勉強を見てもらえるようになって、私も美穂も成績が上がった。

(でも……)

「……ううん、私はいいいよ」

楓馬さんがうちに来る時、何故か美穂は必ずと言っていいほど私を同席させたがる。

時には、外で会う場合にさえ私を誘うことがあった。おかげで母からは、二人の邪魔をするなど叱られることもしばしばだ。

(邪魔しようなんて、考えたこともないのにな……)

どうして美穂は私を誘うんだろう。

楓馬さんと二人つきりで会いたいと思わないのだろうか？

疑問を覚えて一度尋ねたことがあったが、美穂はにっこりと花のように笑って、「二人きりで過ごす時間もちゃんととってあるから、大丈夫」と言った。

その表情には楓馬さんの婚約者として揺るがない自信が溢あふれていて、とても眩まぶしく、そして羨うらやましく思えたっけ。

## 立ち読みサンプル はこまで